

反古を集めて：小説

著者	森，紫迷
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 2
ページ	1 0 3 - 1 0 8
発行年	1916-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6672

反古を集めて

一二、甲一

森

紫

迷

(一) そぞろこと

秋は厭だ厭だと言っても秋は来る 來ても矢張り厭だ。つい二三日前、ふらりと町に出た。そしてステーションの構内を通つた。雑草が丈高くのびて居た緑の色は鮮かだつた。廣い空地も長いプラツトホームも何も變つた事はないだが何となく淋しい、何となくあはれつばい、じつと見つめて居る中に急に悲しくなつて来る。満目蕭條と言つた様な感じに襲はれて来る、僕は秋になつても冬になつても夏を慕ふ人間だ。其の癖夏らしい夏を未だ送つた事がないたまさかに暑い日がデリリと照れば手も足も出ず引込んで居る

眞青な海の上に、にゆつと渦を卷いて居る入道雲、あれが僕は一番好きなのだ。だが僕の理想の様な相像の様な活氣の有る輝きのある雲は未だ一度も見た事がない。その海岸で見た雲もやんわりして居る。吹けば飛びさうにして居る。空も目が眩む様な強い濃い色が欲しい、而も未だ物足らぬうすつばい色しか見當らない夏は活動の象徴だ、活氣が有つて夏に眞の生命が存するのだ。僕は何でも強烈な刺戟がほしい、以前は黒いあはれつばいものが好きだつた。此の見地からして一度は秋の共鳴者であつた。清い月や沈んだ色や色づいた稻穂のうねりや其等は皆無性に嬉しく見えた。僕は夏ならば思ひ切つて夏らしいものが見たい。雲なら雲練だ固めた岩の様な雲がほしい。風が吹いてもゆらともせぬたゞいたらカーンと響きさうな雲がほしい。然

し秋の雲は未だ弱い。

津波の様に秋は来る。袖をすらりと抜けて行く風がヒヤリと胸毛を吹いた時が秋である。低く累高く眞綿の様な白雲がひかれ延ばされて天の一方にくつついた時が秋である。秋はいゝゝが嫌だ

然し秋は何處にも来る。壁の落ちた屋根にも来る。二匁三分と量る所にも来る。秋は石川五衛門である、忍びの術の妙手である。夏だ土用だ七夕だ残暑だと言って居る中にもう来て居る。ほれ其處にも来て居る。頭の方邊にも鬚の先にも上にも下にも右にも左にも来て居るのだ

秋がきていたづら者の意地悪の夏を追ひかけて行く。追て追て地球の端迄もと追ひつめて行く、僕は其の夏を追て居る。オーイオーイと叫ぶ。其の聲は秋風の中に消えてしまふ。待て待てと追かけて行く。其の足は何時かグルリと引き戻されて居る

秋は夏の情力を持つた冬である。春は冬の血をひいた夏である、

夏が秋になつたと言つて無暗に悲觀する理由はない。秋になると氣がすんで来る。そして胸の中の有象無象を一時に吹き散らしてしまふ。だが嫌だ。「燈火親しむ可し」と昔の人は言つた　うまい事を言つたものだ、氣が落ちついてあたりが静かになれば本を読む位造作もない事だ、天が何尺何寸高くなるか、馬の胴廻りがどれ丈殖ゐるか知らないが人は天高く馬肥ゆと言ふ、

僕はならう事なら春と夏とが交るがはるに來たい然し其が不可能である以上は秋と面をつつつき合せなくてはならぬ

三ヶ月の間嫌だ／＼と言て苦虫を噛みつぶした様にして居るのも初まらない。此に於てか秋の長所をギウツ

と握て相當に意義あるものにしなければならぬ。さて其のやり方はどうしたものか、と言つる中にも秋が来る、僕は秋は好みはせぬ。だと言て逃げもかくれもしない。ちつと見て居る中に秋は行てしまふ。時には秋はいゝものだと思ふ。ふとすると秋よりいゝ時はないと思ふ。其處に矛盾があり撞着があつて面白いのだ何が面白いつて？ そんな事を聞く者に言ふ必要はないや。やめちまはう

(大正四、九、六)

(二) 寢床の塵

寢床の中で考へて居る。うご黒い暗の中に何か顔みた様なものが浮んで來た。然し其の記憶はすぐ飛び去つた僕は其れを引き戻さうとする。なかなか出て來ないオーイオーイと追掛ける。雲の中に入つた。霧の中に紛れ込んだ。雲を抜けて霧を出て又青空めがけて飛んで行く。千金の價が有ると言ふ春の一時間を僕はこうやつて無造作に過ごして居る。そして寢床の中で考へて居る。

人が男と言ふ、人が女と言ふ、人が戀と言ふ、人が生活と言ふ、言つて動いて行く、動いて死んで行く其が人である、其が生活である、其の中に戀がある其の中に執着がある、人は其を求める、求めて而して悶ゐる。僕は猶考へて居る

黄いカーテン、しみで汚れた机、今ぼんやりと見つめて居ると、何か白いやんわりしたものになつて來た。そして白いものは圓く角に或は長く或は短く旋轉し逆轉し赤となり青となり黄となり紫となりしてゐる中に記憶の中の或る人にスボリと嵌つた。笑が見ゆる、笑が有れば形が有る、形があれば口が有る、眼が出來た、

眉が出来、鼻が出来た。そして一つの完全な顔になった、どこから初めて現れて来たか解らない、或は全く同時かも知れない、或は一刹那の萬分の一の間を置いて一つ宛出て来たのかも知れない。僕は未だ寢床の中に居る、そして快い暖もりを味はつて居る、其の笑顔が色色に變つて行く。淋しい笑がある、嬉しい笑がある、悲しい笑がある、晴れやかな笑がある、そして顔はぐるりと回轉する。回轉しながら又笑ふ。笑つて又回轉する。そして消え失せる。

僕は猶も餘念なく考へて居る、今度は何も出て来ない、ぼんやりした黒いものがある、正体は解らない横に廣がつた、そして少さく幾つにも分れた。其の一つ一つがキラキラと光る。其の上に青いものがある、輝いて来た、白いものが浮いて来た、一つは空である、一つは屋根である、朝が来たのだ、嗚咽になる、皆消えかけて来た。それ一つ二つ……あーもう無くなつてしまつた。

(三三)の女性

三の女性を眩惑的と言ふ、眩惑的とは迷の衝立を立てて人を見たと言ふ事である、

清次の頭は毛糸の様な強い色彩で包まれた。彼は其を解かうともせぬ、そして片手間の慰みの様に考へて居る、然し片手間の慰みも遂には眞劍になつた眞劍の頂上は三角に尖つて居る、彼は三角の頂上に登り初め、黒い面を被つた人形師はエッサ／＼と後から尻押しをして居る。彼は上りきつて三角の尖りを抱きながら谷を見下ろした、

谷は霧で包まれて居た其のまはりに何かバツと光つた。長い尾を引いて慧星が通つたのである。アツと思つ

た拍子に彼の手は尖りを離れた、彼の体は眞倒様に千仞の谷に落ちて行つた。慧星は又まはつて來た、彼と慧星とはバツタリ逢つた、逢つたとして一瞬である。ビカリと光つたまゝ、幾億萬里の彼方に飛んで行つた、之が第四の女性である。第五を矛盾の女性と言ふ矛盾の中に生きた女性であるからである。矛盾の女性はずつと以前に現れた、然し合理の陰に暫し身を潜めた

其を清次は求めて居る

其の背景も一ヶ所では無い、時と所と人と心とは飛び飛びになつて居る、水の都もある煙の町もある菜種の村もある。櫻の山も有る舞臺が廣いだけに役者も多い。役者が多いだけ筋も混み入つて居る。混み入つた筋には矛盾がある。彼は其の矛盾の中で呼吸しやうとしたのである。而も色彩は濃厚で印象は深刻であつた、ヒロインは際だつて目立つて居た。そして全篇を縦から横に裏から表に縫ひつ絡みつして絶えず活動して居る。ヒーローもヒロインも矛盾の塊りである。言てる事も矛盾である。やつてる事も矛盾である。思つてる事も矛盾である。二人が爲した總ての事が矛盾である。其の矛盾の中に眞理を見出さうとして居る第三者がある。其の第三者は女性である。其の黒幕の中から時にませつ返しては獨り笑壺に入つて居る者がある。此のおせつかいやは男性である。其の周圍を種々な階級。種々な年配の人が取り巻いて居る。或る者は杞憂し或る者は嫉妬し或る者は羨望し或る者はほゝるんで居る。小刀細工も其の中に在り生一本な熱愛もその中に有り彼は其の混亂の間に挟まれて歩一步と矛盾に急いで居る。

ヒロインは内氣だつた。ヒロインの眼は淋しかつた。彼も一度は其が好きだつた。淋しいと言ふ事は美の極限である。思つた。笑ひと愛嬌と清楚と濃艶と加へると夫が内氣になるのかと思つた。其の中にも己に裏切者

が居た。大きい眼、輝かしい瞳、其が彼の理想となる可き根底は既に作られて居た。人は反動として正反對のものを好むものである。

黒に懲りた彼は白を好んだ。赤に倦いた彼は紫を求めた。そして過ぎ去つた矛盾の女性と來る可き憧憬の女性とは十字巴に組んづまぐれつしては遠く夕闇の中に消へ去つて行くのである。

（久遠の女性より）